



## 世界のスローカフェ in CAFÉ

～ドイツ・ベルリン Vol.1～

文/写真 柏原文



ベルリンの冬は長く、暗い。目覚まし時計が鳴らなければ、誰も朝がきたことに気づくことはないだろう。真っ暗闇なのだ。ドイツの冬の日照時間は平均3時間ともいわれているが、実際に太陽が顔を出す日はそう多くない。下手をすると、朝から太陽をいちども拝まずして午後になり、一日中薄暗闇のまま夜に突入することもしばしばだ。

そんな冬のベルリンでピークシーズンを迎える場所は、スキージ場でもなく、屋内ショッピングセンターでもない。カフェである。人々は暗い冬の午後を、キャンドルのともったテーブルをもつカフェで心身ともにあたたく過ごす。コーヒーブレイクやランチに、あるいは誰かと待ち合わせをしておしゃべりをしたり、ひとりで新聞を読んだり書き物をしたりと、思い思いに時を過ごす滞在型の場所だ。

「絵本」を意味する「BILDERBUCH

(ビルダーブッフ)」という名のカフェは、

カフェが軒を連ねる通りの端にある。たい

した特徴のない目立たない入り口のドアを

開けると、ほどよい広さの喫茶スペースが

目に入る。だが実はその向こうに細い通路

が続いており、その何倍もの空間がひろがっ

ている。そこには天井まで届く大きな本棚

が壁一面にあり、ずっしりとしたソファア

がならんでいる。まるで別宅の書斎に戻っ

てきたかのような雰囲気だ。時折、コー

ナーのグランドピアノからは、クラシック

の生演奏が流れてくるが、一番のBGMは

人々の話し声だ。ドイツ語特有の低い声で、

「シュ」や「ハ」といったかすれた音が耳に

優しい。

インテリアは典型的なベルリンのカフェ

である。ざっくりばらんに配置されたテー

ブルと椅子は、ほとんどがアンティーク。い

や古道具といったほうがいい。70〜80年代

の、いわゆる時代遅れの家具が不ぞろいに

組み合わせられている。不ぞろいといえ

ば、ここに集まる人もそうだ。ざっと見たとこ

ろ、今日の顔ぶれは20〜70歳代だろうか。

年代だけではない、客の個性もばらばらで

ある。

そんな不ぞろいの家具や客たちも、気取

りのない雰囲気の中、やわらかな間接照明

のペールをかぶると、いつしかひとつのま

とまりになっていく。世界中の多くのおしゃ

れなカフェがそうであるように、作りこま

れたカフェのカラーが客を選ぶのではない。

ベルリンのカフェはどこもたいだい大雑把

なつくりで、そこに集まる人が雰囲気を作

りあげていく。だから

ここでは、住人も一

見客も旅人も関係なく

ほっとできる。いつど

んな自分を連れてきて

もいい。

それにしても、ベル



### Information

[www.cafe-bilderbuch.de](http://www.cafe-bilderbuch.de)

## 「Café Bilderbuch」 in Berlin



柏原文  
京都生まれ。外資系旅行会社に17年勤務の後独立。現在はトラベルコンサルタント、フリーライターとして活躍。2003年よりベルリン在住。  
<http://www.berlincafe.info/> / [Email.aya@berlincafe.info](mailto:Email.aya@berlincafe.info)